

人間社会学部

試験問題冊子

(B日程 2月21日)

国語

注 意

- ① 試験監督者の指示があるまで、問題冊子を開かないこと。
- ② 問題冊子に落丁、乱丁があった場合は、試験監督者に申し出ること。
- ③ 試験監督者が試験開始の指示をしたら、ただちに解答用紙の所定欄に、受験番号を記入し、マークすること。
- ④ 解答は全て解答用紙に記入すること。
- ⑤ マーク式解答欄および裏面の記述式解答欄の指定された箇所以外は使用しないこと。
- ⑥ 試験終了後、問題冊子は持ち帰ること。

注意 解答はすべて各問の下端の□内に指示された解答欄にマークまたは記入すること。なお、解答欄のうち、この試験で使うのは、マーク式解答欄の□1～□14、記述式解答欄の□A～□Jのみである。

問題一 次の文章を読んで、後の設問に答えなさい。

大学一、二年生に向けた大人数の授業では、私が医療現場や貧困地区の子育て支援の現場で行ってきたインタビューを題材として用いることが多い。そうしたとき、学生から次のような質問を受けることがある。

「先生の言っていることに客観的な妥当性はあるのですか？」

私の研究は、困窮した当事者や彼らをサポートする支援者の語りを一人ずつ細かく分析するものであり、数値による証拠づけがない。そのため学生が客観性に欠けると感じるのは自然なことだ。一方で、学生と接していると、客観性と数値をそんなに信用して大丈夫なのだろうかと思うことがある。「客観性」「数値的なエビデンス」は、現代の社会では真理とみなされているが、客観的なデータでなかったとしても意味がある事象はあるはずだ。

数値に過大な価値を見出していくと、社会はどうなっていくだろうか。客観性だけに価値をおいたときには、一人ひとりの経験が顧みられなくなるのではないか。そのような思いが湧いたことが本書執筆の動機である。

とりわけ気になるのは、数値に重きがおかれた結果、今の社会では比較と競争が激しくなったのではないか、ということだ。

先にもあげた私の授業では、対人援助職のみなさん、そして身体障害の当事者、薬物依存から刑務所を経験した方、差別を受けた方といった人たちをゲストにお呼びしている。大学に入ったばかりの若い学生を前にして、生命とは何か、死を看取るとは、あるいは差別や障害はどのように現代の日本において問題なのかを考えてもらうようにしている。そこで学生から次のような質問を受けることがある。

「誰でも幸せになる権利があると言うが、障害者は不幸だと思う」

□a 障害とはなんだろうか。しばしばimpairmentが器質的な欠損としての障害であるのに対してdisabilityは環境が整っていないがためにできないことが生じてしまう障害を指す。

地方で生活している人が、自家用車を持たずに不便であるときに「障害」という言葉は使わないだろう。ところがエレベーターがないと上の階に上れない車いすユーザーは「障害者」と呼ばれる。エレベーターという環境さえ整えば不便は生じないはずだ。disabilityとはこのような事態である。環境の整備によって、ある場面では障害が生まれ、ある場面では生まれない。あるいは、ろうの人たちは、ろう者のグループのなかでコミュニ

ニケーションを取るときには不自由はない。ところが聴者の社会のなかに入った途端¹に「聴覚障害者」として不便を被り場合によっては差別を受ける。つまりdisabilityとしての障害から考えたときには、環境を整えるか整えないかという社会の側の姿勢が問われるのだ。

もし「障害者は不幸だ」としたら、それは社会の側の準備の問題である。さらには、幸せ／不幸せの基準をどこに置くかを他人が判断できるのだろうかという疑問も残る。

貧困について議論していた授業で、生活保護をめぐるこんなコメントが来たことがある。

「働く意思がない人を税金で救済するのはおかしい」

私たちは汗水垂らして働きながらわずかな収入を削って税金を納めている。たしかに苦労している私が払った税金で「働く意思がない人」を助けるというのは腹立たしいかもしれない。

でも、もしかすると、「働く意思をもたない」人にはなにかの事情があるのかもしれない。フィールドワークのなかで、うつ病で朝起きることができないひとり親家庭に出会うことがあった。その母親は、パートナーのDVから子どもを連れて逃げてきて、暴力の後遺症でうつ病に苦しんでいた。

精神障害や発達障害といった事情ゆえに、安心して働く環境を手にすることができないならば、それは社会の側が排除しているのかもしれない。働きたいと一度は思ったが、働けるチャンスがないため働くことをあきらめる人もいる。社会のほうが、働きやすい環境を作ることが困難にしているのだとすると、社会が生活を支えることは自然なことだろう。

おそらく学生たちのコメントは私たちの社会の代表的な意見でもあり、私自身もかつては同じように考えていた。学生が、社会的に弱い立場に追いやられた人に厳しいのは、そもそも社会のなかにそのような厳しい視線が遍²在しているからだ。そして、その言葉のなかに社会をどのように考えていくとよいのか、どう行動したら私たち自身が生きやすくなるのかのヒントもある。そこで、本書では、私たち自身を苦しめている発想の原因を、数値と客観性への過度の信仰のなかに探る。

一見すると、客観性を重視する傾向と、社会の弱い立場の人に厳しくあたる傾向には、直接の関係はなさそうだ。しかし、両者には数字によって支配された世界のなかで人間が序列化されるという共通の根っこがある。そして序列化されたときに幸せになれる人は実のところはほとんどいない。勝ち組は少数であるし、勝ち残ったと思っている人もつねに競争に脅かされて不安だからだ。

さらには、こういった社会への厳しい視線は、学生自身を苦しめている。なぜなら、自分自身を数字に縛り付けて競争を強いるからである。かつて私もそうだった。競争することが社会のなかで大事なことなのだと思いきんでいた。私が教える学生たちの多くも、競争へと駆り立てられ自分で自分を苦しめている。この数字と競争への強迫観念から解放されることで私自身も楽になった。

とはいえ数字を用いる科学のイトナミを否定したいわけではない。数字に基づく客観

的な根拠はさまざまな点で有効であるし、それによって説明される事象が多いことは承知している。それでも、数字だけが優先されて、生活が完全に数字に支配されてしまうような社会のあり方に疑問があるのだ。数字への素朴な信仰、あるいは数値化できないはずのものを数字へと置き換えようとする傾向を問いなおしたい。

(中略)

自然科学、社会学、心理学は、人間の経験から独立したデータを求めることで、自然という客体、社会という客体、心という客体を生んだ。三つの客体が生まれるどのプロセスにおいても、人間の主体的な経験は消されていった。あるいは心理学においてそうであるように、経験そのものがデータとなって数値へと切り詰められていく。人間の経験は、感覚や感情、体の動きだけにとどまらない。対人関係のさまざまなやりとりや、社会の影響、自然とのやりとりを含みこむ。自然・社会・心の客体化を通じて自然・社会・心が「モノ」あるいはデータになるとき、経験という「やりとり」が視野の外へと消される。

このとき一人ひとりの一人称的な経験と二人称的な交流の価値が切り詰められていく。客観化する学問そのものが悪いわけではない。客観化が、世界のすべて、人間のすべて、真理のすべてを覆い尽くしていると思いきむことで、私たち自身の経験をそのまま言葉で語るができなくなることが問題なのだ。

学生たちが「先生の授業のどこが客観的なのですか」と私に問いかけるとき、その背景にはこのような客観化の歴史がある。たしかに、近代の学問は森羅万象を客観化しようとするプロセスとして生まれた。しかし客観化を極度に推進していったときに切り落とされたものがある。それゆえ学問の世界の揺り戻しもまた起こる。

研究者の介入についての考察は、自然科学においても人文社会科学においても検討されてきた。例えば人類学においては、研究者が現場にどのように入り込むかが、データにどう影響するかということについての考察が深められてきた。

社会学では、社会に生きている人々の経験を重視するライフストーリー研究や、エスノメソドロジーといった方法論が生まれてくることになる。個別の経験を数値にカンゲン⁵することなく、個別の経験から出発して社会の動きを見ようとする方法論だ。

歴史学においても、国家が残した記録ではなく、民衆の経験をさまざまな資料から考えていこうという立場、国家ではなく小さな単位あるいは地中海世界といった国家を超える領域を扱う立場、聴き取りから記憶を再構成していこうとする立場といった多様な動きがでてくる。

さらに、心理学においては、臨床心理学のように一人ひとりのクライアントの経験、クライアントとセラピストとのやりとりを重視する学問や、ナラティブを重視するさまざまな質的研究が並走している。

目立たないかもしれないが消えることがないこれらの流れは、客観化しえない経験を消し去ることはできないことを示している。

(村上靖彦 『客観性の落とし穴』より一部改変)

問1 傍線部1、2、4の漢字のよみをひらがなで、傍線部3、5のカタカナを漢字に直して、それぞれ記述式解答欄に記入しなさい。

1 2 3 4 5

問2 傍線部ア「先生の言っていることに客観的な妥当性はあるのですか？」という質問に対する筆者の考えとして最も適当なものを、次の①～④の中から一つ選びなさい。

- ① 授業では、数値により証拠づけられた事実を強調する必要がある。
- ② 多くの経験を積み重ねることで、数値による証拠づけが可能になる。
- ③ 数値で証拠づけられない一人ひとりの経験にも、学問的な意味がある。
- ④ 授業では、題材である「語り」を数値化し証拠づけていく過程を示している。

問3 傍線部イ「障害者は不幸だと思う」という意見に対する筆者の考えとして最も適当なものを、次の①～④の中から一つ選びなさい。

- ① 障害者が幸福か不幸かを判定する基準は、社会が定める。
- ② 器質的な特性による障害者については、学生と同じ意見だ。
- ③ 障害者は不幸であるという思い込みこそが、障害者を不幸にする。
- ④ 障害者がどの程度不幸かを、本人以外の者が判断することはできない。

問4 空欄 に当てはまる語として最も適当なものを、次の①～④の中から一つ選びなさい。

- ① そもそも
- ② やはり
- ③ あるいは
- ④ さらに

問5 傍線部ウ「働く意思がない人を税金で救済するのはおかしい」というコメントに対する筆者の考えとして最も適当なものを、次の①～④の中から一つ選びなさい。

- ① 税金を納めていない者は、税金の使途に不満をいうべきではない。
- ② 自分も働いて税金を納めているので、同じように腹立たしく思う。
- ③ 働かない人それぞれに事情があるかもしれず、一概に批判できない。
- ④ 社会の中で生活する「働いていない人」を社会で支えるのは当然だ。

問6 傍線部エ「数値化できないはずのものを数字へと置き換えようとする傾向」が生んだ結果として最も適当でないものを、次の①～④の中から一つ選びなさい。

5

- ① 人間が序列化されるようになった。
- ② 質的研究を生んだ。
- ③ 近代の学問を発展させた。
- ④ 学生たちを競争へと駆り立てた。

問7 傍線部オ「一人称的」のここでの意味として最も適当なものを、次の①～④の中から一つ選びなさい。

6

- ① 個別的
- ② 一般的
- ③ 典型的
- ④ 利己的

問8 本文の趣旨に最も合致するものを、次の①～④の中から一つ選びなさい。

7

- ① 学問の発展には、万物を客観化する方法と、数値化できない事象を扱う方法との協働が必要である。
- ② 自然、社会、心を客体化し、数値化する近代の学問は、人間の主体的な経験を軽視する傾向が強い。
- ③ 自然、社会、心に関する事象を客体化することの是非は、つねに研究者たちの論争的になってきた。
- ④ 社会や心を客体化して発展した学問体系は、社会的弱者の生活環境の改善を困難なものにしてきた。

問題二 次の文章を読んで、後の設問に答えなさい。

「忠実な絵画を描くには、対象があるがままにコピーすることをできるだけ目指さなければならぬ」。この短絡的な指図は私を困惑させる。というのも、私の目の前にある対象は、男でもあり、原子の集まりでもあり、細胞の複合体でもあり、ヴァイオリン弾きでもあり、友人でもあり、まぬけでもあり、さらに他にもいろいろ言えるような対象だからである。これらのうちのどれも、当の対象があるがままに成り立たせているものではないのだろうか。だとすれば、何か別のものがあるのだろうか。一方、これらのあり方がすべて当の対象のあるがままの姿だとすると、その唯一のあるがままの姿はないことになる。私はそうした諸々のあり方を一度にコピーすることはできない。さらに、コピーするあり方が多ければ多いほど、結果として出来上がるのはより写実的でない絵だろう。

そういうわけで、私がコピーすべきは、そうした側面の一つ、つまり当の対象のあり方あるいは見え方のうちの一つであるということになるように思われる。しかし、もちろんそうしたあり方のうちのどれでもよいというわけではないだろう。たとえば、雨粒越しに酔っぱらいの目に映るものとしてのウエリントン公をコピーしてもしょうがない。むしろふつうに考えれば、コピーすべきは、愛情や敵意や関心によって曇ることなく、思考や解釈によって色づけされることもなしに、適切な距離を持って、好ましい角度から、十分に明るい光のもとで、いかなる器具も使わずに、標準的な目に映るものとしての対象である。ようするに、混じり気のない条件のもとで自由で無垢な目に映るものとしての対象をコピーすべきだということになる。

この考えの難点は、エルンスト・ゴンブリッチが主張するように、無垢な目などないということにある。目は「無垢どころか」つねにもうろくしている。それは自身の過去に執着しているだけでなく、耳や鼻や舌や指や心や脳からの新旧の当てこすりに取りつかれたかたちで働くのだ。目は、自力で作動する道具として機能するのではなく、複雑でさまざまな有機的組織の従順な一員として機能する。目がものをどのように見るかだけでなく、目が何を見るかもまた必要と偏見に左右される。目は対象を選び、拒み、組織化し、見分け、連関させ、分類し、分析し、構築する。目は対象を映すというよりも、それを取り上げて作り出す take and make のものである。そして、目は、それが取り上げて作り出すものを、剥き出しのものとして、属性なしの実体として見るのではなく、事物として、食べ物として、人として、敵として、星として、武器として見るのである。いかなるものも、ありのままに見られることはないし、ありのままのあり方であることもない。

無垢の目という神話と絶対的な所与¹という神話は、たちの悪い共犯者である。両者とも、次のような考えにもとづくと同時にそれを助長するものである。すなわち、知ることということは感覚から受けとられたなまの素材を加工することであり、そしてこのなまの素材は「経験を」純粹化する儀式か、または系統だった仕方で解釈を差し控えることによつて発見することができるという考えだ。しかし、感覚受容と解釈は不可分な働きである。両者は全面的に相互依存している。カントの格言を真似て言えば、無垢な目は盲目であり、純潔の心は空虚である。さらに、「感覚を通して」受けとられたものとそれ

に対してなされた加工は、その結果出来上がったものを見ても区別できない。注釈の層を剥がしていくと中身があらわになるといったことはないのである。

もちろん、芸術家が無垢の目を得ようと努力した方がよい場合もあるだろう。というのも、そうした努力を通じて、パターン化した古臭い日常的な見方から抜け出して、新鮮な洞察³にいたることが a あるからである。これとは逆の努力、つまり個人的な見方を最大限に押し出す努力もまた、同じ程度に——しかも同じ理由で——活気づけの効果をもたらす場合がある。しかし、こうした最大限に中立的な目と最大限に偏った目なるものは、たんにそれぞれ異なる仕方⁴でセンレン⁴されているというだけのことである。もつとも禁欲的な見方ともつとも放肆⁴な見方は、地味な肖像画と辛辣なフウシガ⁵のようなものだ。つまり、両者のちがいは、対象についてどれだけ多く解釈しているかという点にあるのではなく、たんに対象をどのように解釈しているかという点である。

このように再現のコピー説は、再現においてコピーされるべきものがなんなのかを特定できないという点で最初からつまづいている。コピーの対象は、その唯一のあり方でもなければ、そのあり方のすべてでもなく、心なき目に映るあり方でもない。さらに、なんであれ対象のあり方——つまりその側面⁷——をコピーするという考え自体に問題がある。というのも、側面は、たんに〈特定の光のもとに特定の距離と角度から見られた対象〉という以上のものだからだ。側面は、われわれがとらえたり考えたりするものとしての対象であり、当の対象のヴァージョンあるいは解釈である。なんらかの対象を再現するとき、われわれはそうした解釈をコピーしているのではない。むしろそれを実現しているのである。

言い換えれば、どんな対象であれ、その性質を完全に削ぎ落としたかたちで再現されることも、その性質を完備したかたちで再現されることもない。絵がただだたんに x を再現するということはありえない。絵はつねに、x を人間として再現するとか、x を山で、あるようなかたちで再現するとか、x がメロンであるという事実を再現するとかいう仕方⁸で対象を再現する。仮に事実のような何かが存在するとして、事実をコピーするというのがどういふことなのかを理解するのは困難である。また、x をしかじかのものとしてコピーするというのは、何かを贈り物として売るといふのとあまり変わらない。そして、何かを人間であるようなかたちでコピーするなど述べるのは、まったくナンセンスなことである。もちろん、こうしたことについては、さらに突っ込んで考えていく必要がある。とはいえ、再現がいかに模倣の問題でないかについては、これ以上論じる必要はないだろう。

(ネルソン・グッドマン 戸澤義夫・松永伸司訳『芸術の言語』)

Languages of Art: An Approach to a Theory of Symbols by Nelson Goodman.
Published by Hackett Publishing© 1976 by Nelson Goodman. Reprinted by permission
of Hackett Publishing Company, Inc. All rights reserved.

問1 傍線部1、2、3の漢字のよみをひらがなで、傍線部4、5のカタカナを漢字に直して、それぞれ記述式解答欄に記入しなさい。

1 [F] 2 [G] 3 [H] 4 [I] 5 [J]

問2 傍線部ア「この短絡的な指図は私を困惑させる」とあるが、筆者が困惑している理由として最も適当でないものを、次の①～④の中から一つ選びなさい。 [8]

- ① 対象のあるがままの姿は唯一ではないから
- ② 対象のさまざまな要素のどれもが当の対象のあるがままの姿だから
- ③ 対象の諸々のあり方を一度にコピーすることはできないから
- ④ 対象をコピーするあり方が多ければ多いほど写実的な絵ができるから

問3 傍線部イ「コピーすべき」とあるが、筆者が絵画を描くときにふつうに考えて「コピーすべき」と考えているのはどのようなものか。最も適当なものを、次の①～④の中から一つ選びなさい。 [9]

- ① 愛情を持って観察した対象
- ② 形を理解してとらえた対象
- ③ 混じり気のない目に映る対象
- ④ 器具を使って計測した対象

問4 傍線部ウ「標準的な目」と同じ意味をもつ本文中の語句として最も適当でないものを、次の①～④の中から一つ選びなさい。 [10]

- ① 心なき目
- ② 偏った目
- ③ 中立的な目
- ④ 無垢な目

問5 傍線部エ「神話」のここでの意味として最も適当なものを、次の①～④の中から一つ選びなさい。 [11]

- ① 超自然的な力を称賛し畏怖するもの
- ② 絶対に存在すると信じられているもの
- ③ 古代から語り伝えられているもの
- ④ 神がかった才能と考えられているもの

問6 傍線部オ「放埒」の意味として最も適当なものを、次の①～④の中から一つ選びなさい。

12

- ① きまりやしきたりに従わないこと
- ② 手加減がなく厳しいこと
- ③ 邪念が全くないこと
- ④ 物事を深く考えないこと

問7 空欄 a に当てはまる語として最も適当なものを、次の①～④の中から一つ選びなさい。

13

- ① るる
- ② よよ
- ③ まま
- ④ そそ

問8 本文の内容に最も合致するものを、次の①～④の中から一つ選びなさい。

14

- ① 忠実な絵画を描くときには、芸術家は対象をあるがままにコピーするだけを目指す必要がある。
- ② 対象を再現することは模倣の問題であり、画家は対象をよりよく見るための適切な環境を模索すべきである。
- ③ 忠実な絵画を描くには、無垢の目を磨く最大限の努力と偏った目を磨く最大限の努力との両方が必要である。
- ④ 芸術家は対象をその性質を完全に備えたかたちで、またはその性質を完全に取ったかたちで再現することはできない。

(以上)